

「真のお母様」

皆さん、こんにちは。

今日は、「真のお母様」という題目で、説教を致します。

真のお母様の自叙伝『人類の涙をぬぐう平和の母』発刊

2020年に発刊された真のお母様の自叙伝『人類の涙をぬぐう平和の母』はみなさん読んだことがあるでしょうか。

このお母様の自叙伝には、真のお父様と共に神様と人類を真の母として愛して来られたお母様の心情の路程が綴られています。

今日は、お母様の自叙伝を紹介しながら、お母様について学び、お母様に思いを馳せてみたいと思います。

はじめに、お父様の自叙伝の中から、お父様がお母様について語られた部分を紹介したいと思います。

妻は 14 人の子供を生みましたが、世界中を講演して回る私と一緒に家を離れているときは、毎日、子供たちに手紙やはがきを書いて送るのを欠かさないほど、子供たちを愛で包んで育てました。

21 年間に 14 人の子供を生んで育てたのですから、言うに言えない苦労があったはずですが、その素振りさえ見せませんでした。出産を控えた妻を置いて、私が海外に行ってしまったことも一度や二度ではありません。（中略）それでも妻は、一度もつらいと不平を言ったことはありません。今も済まないと思うのは、一日に 2,3 時間しか眠らない夫に合わせるために、妻もこれまで毎日 2,3 時間しか眠ることができなかったことです。

妻は自分の結婚記念の指輪まで人にあげてしまうほど情け深い女性です。ぼろを着た人を見れば服を買ってあげ、おなかを空かせた人に会えばご飯を振る舞いました。

（『平和を愛する世界人として』 p.208）

このように、お父様はお母様のことを、妻として母として偉大であり、与えてあげたいという情がとても深い女性だと証しておられます。

お母様の自叙伝には、お父様との思い出や共に歩んだみ旨のエピソードがたくさん綴られています。それでは、実際にお母様の自叙伝を訓読しながら、お母様のことを共有していきたいと思います。

お母様が執筆された自叙伝

自叙伝の序文には、お母様がどのような思いでこの自叙伝を執筆されたかが記されていま

す。

私はこれまで、天の父母様の本然の立場を取り戻してさしあげるために、そして、耳があっても聞こえず、目があっても見えていない人々のために、東から西、南から北へと地球の至る所を回り、天の摂理の真実を伝えることにすべてを投入してきました。砂嵐が吹き荒れ、一寸先も見えない砂漠の真ん中で、一本の小さな針を探すような、切実で切迫した心情で、天の摂理の真実を伝え続けたのです。

(中略)

本書には、このような私の生涯の一端が記されています。「独り娘」の名で、神様を「父母」として侍るために生きてきた人生を振り返り、私の率直な思いを初めて、この本に込めました。

(中略)

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.4～7)

お母様の生き方・信条

自叙伝には、お母様がお生まれになる背景から、お母様の半生に渡って、本当にたくさんの内容が記されています。

この時間、すべてを紹介することはできませんので、お母様がどのようなお方であるかについて抜き出してお伝えしていこうと思います。

まず、お母様の生き方や信条が分かる部分を紹介します。

100年前、祖母が国を取り戻すために独立万歳を叫んだことを思いながら、私は人類を救い、平和な世の中をつくるため、生涯、命と情熱を余すことなく燃やしてきました。非暴力と平和を叫んだ3・1運動の崇高な精神を受け継ぎ、常に私は、平和を何よりも優先してきました。いつも時間に追われる気持ちで、多くのことをしてきました。私に与えられた使命を果たすために最善を尽くし、変わらぬ心と志でただひたすら、ために生きる人生を過ごしてきたのです。これは、誰にも想像だにできないことでしょう。

ですから、生きるに当たって肉身が必要とする休息を、まともに取ったことがありません。食事をしたり眠ったりすることも忘れて過ごすことが多くありましたが、体調を崩すことすらも贅沢であるかのように感じながら生きてきました。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.26)

このようなお母様がお生まれになり、成長していかれた背後に、先祖の家門と祖母からの篤い信仰の伝統があったことが書かれています。

忠誠を尽くした趙漢俊^{チョハンチュン}の家門を通して、天は信仰心の篤い祖母・趙元模^{チョウォンモ}を送ってください、その祖母から、さらに一層深い信仰心を持つ母の洪順愛^{ホンスンアイ}が誕生しました。韓半島に神様の愛する独り娘を誕生させるための天の摂理と精誠が、はるか昔、先祖の趙漢俊^{チョハンチュン}から始まり、私にまで綿々と続いてきたのです。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.55)

私はまだとても若い年でしたが、母は祈るように力を込めて、「主の貴いお姫様」と言ってくれました。これは、たった一人の娘である私に向けた、母の生涯をかけた祈りの題目でもありました。こうして、私は神様の娘、主の娘であるという自負心を持って、すくすくと育ったのです。

（『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.56）

母は私に、小学校卒業後、世の中とは関係のない、主のための聖女の道を歩ませようとしていました。神様の娘として召命を受けるためには、純潔でなければならないという思いで、精誠を尽くしたのです。新孝小学校の 5 年に転入した私は、遊びたい盛りの年に、過酷とも言えるほどの厳しい信仰生活をするようになりました。祈祷、敬拝、精誠を捧げることに、ほとんどの時間を費やすようになったのです。

（『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.89）

妻としてのお母様

お母様はいつもお父様の隣で真の父母として歩んで来られました。夫である文鮮明総裁にどのように侍ってこられたのか、「妻としてのお母様」の様子を紹介したいと思います。

お父様が聖和された後も、お母様はお父様と心をつなげて、そのみ旨を進めて来られました。

「すべて成し遂げた、すべて成し遂げた！すべてを天の前にお返しする。完成、完結した」結局、この祈祷が、真の父である文総裁の最後の祈りとなりました。

それはアルパでありオメガ、始まりと終わりがすべて含まれた祈りであり、み言でした。少しの間、苦しそうに呼吸をした文総裁は、私の手をぎゅっと握りました。

「ありがとう！頼んだよ！」

息苦しそうにしながらも、「本当にすまない。本当にありがとう」と立て続けに話す文総裁。私はその手をさらに固く握りしめ、慰労の言葉と眼差しで、安心してもらえるよう努めました。

「何も心配しないでください」

2012 年 9 月 3 日、文鮮明総裁は数えて 93 歳を一期として、神様の懷に抱かれました。

（『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.28～29）

文総裁が^{ソンファ}聖和した後、私は朝夕、霊前に食事を捧げ、^{ボニャンウォン}本郷苑まで往復しながら、心の中で夫と多くの会話を交わしました。そうして、夫の考えが私の考えとなり、私の考えが夫の考えとなりました。

（『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.30）

お母様がお父様とご聖婚された時のお母様の心情も綴られています。

文総裁は何より、自身を犠牲にして献身的に歩む、ために生きる心を持った女性を探していらっしやいました。学歴や家柄、財産、美貌は求めていらっしやいませんでした。絶対的

な信仰を持って、この世界に愛を馳せる女性、この世界を救うことのできる女性でなければなりませんでした。

(中略)

私は天のみ^{こころ}意に気づいていましたが、それを話すことはしませんでした。探し出すのは文総裁の責任だったからです。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.106)

私は文総裁を独り子として迎え、神様のみ旨を成し遂げてさしあげると決心しました。それは神様が私に下された、天の新婦、宇宙の母としての使命でした。これから歩むことになる路程が、想像を絶する険しい茨の道であることも知っていました。しかし、その時、私は神様のために、世界の人類を救う使命を必ず果たすと決意したのです。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.114)

母としてのお母様

お母様は人類の真の母であると同時に、14 人のお子様をお生みになり育ててこられました。「母としてのお母様」を自叙伝の中から紹介します。

神様は私たち夫婦に、多くの子供を授けてくださいました。子供たちは多くの兄弟姉妹に囲まれ、狭い部屋の中で窮屈な思いをしながらも、お互いを愛し、大切にしながら育ちました。私は、子供たちのことを小さな神様だと感じていました。毎日頬にキスをし、温かい言葉を交わしながら、時間さえあれば子供たちのために祈りました。父母と子女が一つになり、共にあるとき、その場に神様が臨在されるのです。

私は聖婚後、13 人以上の子孫を生もうと決心し、最終的に 14 人生みしました。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.123)

体は非常に大変でしたが、私は毎年のように子供を生み、4 回にわたって帝王切開をしました。

(中略)

結局、私は 4 回手術をして子供を生み、天と交わした約束を果たして、責任を完遂しました。最後の帝王切開をしてからもう 37 年が過ぎましたが、いまだに痛みの記憶が残っています。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.124)

「お母さん、また荷物を詰めているのですか？」

すぐには答えられません。すると、私の隣で黙々と荷造りを手伝ってくれていた長女の^{イエ}響^{デン}進も、今さらながら尋ねてきます。

「お母さん、今度はどこに行くのですか？」

大きなカバンを取り出して服をたたんでいると、子供たちはすぐに気がつきます。母親がいつもそばにいて、一緒に遊び、抱き締めてくれることを願う子供たち。しかし実際は、子供たちと一緒にいてやれない日のほうが多くありました。人との面会、教会の仕事、地方巡回など、すべきことが私を捕らえて放さなかったのです。海を越えて外国に行くとなると、

カバンを取り出すところから、気苦労が絶えませんでした。

(中略)

世界巡回では、過密スケジュールの中、新しい都市に着くたびに合間を縫って、絵葉書を買いました。夜 12 時過ぎ、ようやく仕事が終わったところで、私を待つ子供たちに便りを書くのです。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.147～149)

このようにお母様は、真の母としてのみ旨のため、子供たちと過ごすことが難しいことが多くありました。それでも、手紙を欠かすことなく、子供たちに愛情を伝えていきました。

リーダーとしてのお母様

また、お母様は神様のもとに人類を復帰するという摂理を牽引してこられました。その摂理分野は多岐に渡ります。そのような「リーダーとしてのお母様」について紹介します。

私たち夫婦は、理論的な探究と活動にとどまらず、実際に技術の平準化を提唱しながら、様々な取り組みを行いました。魚を粉状にして食料用に普及させることで、多くの人々が飢えから抜け出せるようにするなど、理想世界を実現するために、半世紀以上、力を注いできたのです。

文総裁と私は早くから、韓国からすると地球の真裏に当たる南米のパラグアイやブラジルにまで足を運びました。そこで、まさに一介の農夫や漁夫となり、炎天下、人類の未来の食糧問題を解決するために食べることも忘れて働きました。滴る汗を手でぬぐいながら深刻に歩んだ日々が、今も脳裏に焼きついています。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.36～37)

また、世界中に宣教師を送られ、真の父母様と真理のみ言を伝えていきました。

今もそうですが、私たち夫婦は宣教師を見知らぬ土地に送り出す際、天をつかんで切実に祈らざるを得ませんでした。特に共産主義国家に向かう宣教師に対しては、一層激しく祈祷しました。しかし、不幸にも殉教者が出たらどうしようかと、湧き上がる不安を抑えることはできませんでした。

(中略)

短い会合を終えて再び任地に向かう彼らを、私は一人一人抱き締め、見えなくなるまで手を振りながら見送りました。いつまた会えるかも分からないまま、戦場よりさらに過酷な地に旅立つ宣教師のことを考えると、胸が痛み、涙があふれそうになりました。

(『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.144～146)

そして、神様と真の父母様のもとで結婚する「祝福」を与えられ、人種や国を超えた幸せな世界の実現を進めてこられました。

韓国、そして世界各地で開催されてきた家庭連合の合同結婚式は、人類歴史上、最も神聖で貴重な行事です。これまでに祝福結婚をした新郎新婦は、数億組に上ります。今や世界の

どの国に行っても、祝福家庭が必ずいます。韓国人の夫と日本人の妻、アメリカ人の夫とドイツ人の妻など、国際家庭が幸せに暮らしています。言語の違いや生活習慣の違いなどはいずれ克服できます。大切なことは、夫婦が互いに愛し合い、神様のみ旨を実践しながら生きていくことなのです。

（『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.281）

世界を巡回され、その地域のリーダーたちと会われながら、歴史的な恨みを解いて愛していかれました。特に、長く奴隷制度によって苦しんできたアフリカを愛されました。

ゴレ島の奴隷収容所は2階建てになっており、主人である白人は2階に住んでいました。一方、1階にはアフリカの至る所から捕らえられてきた黒人奴隷たちが、船で運ばれるまでの間、滞在していました。（中略）

ゴレ島を訪れる各国首脳や指導者のほとんどは、主に2階を見学して帰るのが慣例になっています。しかし、私は1階の「帰らざる扉」に手を当て、奴隷となった人たちの解怨のために切実な祈りを捧げました。共に参加していたゴレ島の区長をはじめ、多くの人々が共に痛哭しました。

（『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.332）

未来人材育成を願われるお母様

お母様は、み旨を進められながらも、未来世代である青年学生たちの育成に本当に投入しておられます。そのお母様の投入と愛を感じながら歩む私たちとなりたいですね。

私は文総裁が^{ソンファ}聖和した際、世界中から届けられた^{ちょういきん}弔慰金をすべて、^{ウォンモ}圓母平愛奨学苑の基金としました。また、宣教用のヘリコプターを売却し、その基金をさらに増やしました。私が最も重点を置いているのが、青年の人材を育て、奉仕と分かち合いを通して、平和の夢を実現していくことです。（中略）私は夢とビジョンを持った世界の青少年に毎年奨学金を支援し、彼らを未来の指導者として育てています。

（『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.245）

未来を担う人材を育成するためには、時を逃してはいけません。自分の両親よりもさらに大きく天の前に忠孝を尽くす人になるという覚悟のもと、勉強はもちろん、熱心に信仰生活に励むように導かなければなりません。そこで私は、「^{フアラント}天宙平和統一国（天一国）」を建設する未来の人材を育成するため、花郎徒を凌駕する「^{ヒョチヨンサン}孝情郎」という名で、特別教育を行っています。

（『人類の涙をぬぐう平和の母』 p.254）

今日は、お母様の自叙伝の中から、お母様がどのような方なのかについて抜粋して紹介してきました。ぜひお母様の自叙伝を手にとって、深くお母様について尋ね学んでいただきたいと思います。

以上で説教を終わります。ありがとうございました。